

「祝！同窓生が母校の診療教授就任」

この度、同窓会会長で、2期生の増田昌人さんが琉球大学医学部附属病院 がんセンター長・特命准教授・診療教授に就任されました。我々同窓会会員にとっても大変喜ばしいニュースですので、今後の抱負について寄稿していただきました。

沖縄県のがん対策にご協力をお願いします

がんセンター長・特命准教授・診療教授 増田昌人（2期生）



このたび、諸先生のご推薦により、本年7月に琉球大学医学部附属病院特命准教授、並びに診療教授を拝命しました。

私は1988年に2期生として卒業し、第二内科（三村悟郎教授）に入局しました。三村先生には、医師だけではなく社会人としても、いろいろなことを教えていただきました。専門研修では血液学を専攻し、故荒木弘一助教授のご指導を受けました。臨床研修終了後母校の大学院に進学し、1994年に修了、学位をいただきました。

その間、造血幹細胞移植術の習得のために九州大学大学院に短期留学し、血液学の泰斗であった第一内科仁保喜之教授のご指導をいただきました。原田実根助教授（前教授）と赤司浩一先生（現教授）に直接移植の手ほどきを受け、帰沖後の1992年2月に沖縄県で最初の移植（このときは同種骨髄移植）を行いました。

当時、「沖縄県で骨髄移植を」との声が病院内外で大きくなり、私が大学院生であるにも拘らず臨床で国内留学することとなりました。基礎医学に直結している血液学に魅力を感じ、大学院では是非基礎の教室で深く研究をしたいと入局時からお願いをしていたこともあり、私自身非常に葛藤もあったのですが、当時血液内科グループは3名しかおらず、私が移植を担当するように命じられたのです。当初はこのような状況でしたが、その後はこの領域を専門とし、日本造血細胞移植学会評議員・委員会委員として学会活動にも関わるようになったのですから、人生はどのようになるかわからないものです。

1997年に第二代教授高須信行先生のご推薦により、英国Wales大学にポスドクで留学しました。帰国後の1999年からは血液内科グループ長として、JCOG（日本臨床腫瘍グループ）や厚生科研等の研究班の一員として、臨床試験に積極的に取り組みました。その中で成人T細胞白血病／リンパ腫における化学療法と造血幹細胞移植療法の標準治療の確立に関わられたのは、望外の喜びでした。

その後、琉大病院が都道府県がん診療連携拠点病院（以下拠点病院）の申請をするにあたって、病院内にがんセンターが設立されることが決まり、第二内科からがんセンターに異動することになりました。血液グループが10名を超え、臨床試験に関しては軌道に乗っていたものの、実験的な手法を含む全ての移植方法が施行可能になった時期であり、基礎研究も含めて国内外に留学するメンバーを出し始めた時期でした。そのため、まだまだ移植医療を含め第二内科で仕事を継続したいとの思いが強く、当初は瀧下修一病院長（当時）からの要請をお断りしました。しかし、他の講座の先生方からの要請、さらに瀧下教授から再三に亘る要請があったため、2007年10月がんセンターという新天地に移ることとなりました。

がんセンターを立ち上げてからは、極めて多岐にわたる拠点病院としての義務を果たす仕事に走り回っている毎日です。専門外であった「がん対策」の領域に踏み込み、当初は非常に不安だったのですが、前病院長須加原一博教授（現医学部長）、現病院長村山貞之教授のご指導をいただき、なんとか職務を果たしています。異動後に、琉大病院が中心となり「沖縄県がん診療連携協議会」を組織し、その下に7つの専門部会を設置し、がんセンターはその事務局を務めています。専門部会の医師委員の多くは、琉大の先輩、同期、後輩であり、同窓会の皆さんには本当に力になって頂いています。

研究面では、がん研究開発費「がん対策とその推進に資する国立がん研究センターの新たな機能のあり方に関する研究」班の分担研究者として、地方の声・現場の声を届ける役割を担っています。また、他の研究班の分担研究者または協力者として、「患者必携」の発刊から普及啓発のための臨床試験、「Collaborative Staging」の日本への導入のための臨床試験、がん医療の質の評価のための「QI (Quality Indicator)」を用いた臨床試験を開始しております。

最後になりましたが、これまで多くの方々にお世話になり、支えていただいたことに改めて感謝を申し上げます。今後ともご指導をいただけますようお願い申し上げます。